



TITLE:

ヴェトナム黎明初期の清化集團について

AUTHOR(S):

八尾, 隆生

CITATION:

八尾, 隆生. ヴェトナム黎明初期の清化集團について. 東洋史研究 1988, 46(4): 792-822

ISSUE DATE:

1988-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154219>

RIGHT:

ヴェトナム黎朝初期の清化集團について

タインホア

八尾隆生

はじめに

第一章 清化集團の形成

第一節 抗明戦と清化集團

第二節 開國功臣と清化集團

第二章 清化集團の展開

第一節 太祖・太宗期の政權

第二節 仁宗期の政權

第三節 清化集團下位の動向

第三章 清化集團の再編

第一節 黎宜民のクーデタ

第二節 清化集團による逆クーデタ

第三節 聖宗初期の政策

おわりに

はじめに

従来より、ヴェトナム前近代史上、黎朝の五代皇帝聖宗（在位一四六〇—九七）が、最も強力にして安定した集權國家を

築いたことは通説となっている⁽¹⁾。彼の主な業績としては、例えば國內では主に明制に範をとった官僚制及び軍制の整備、唐律に範をとりながらもヴェトナム独自の慣習等をも加味した刑律の制定施行⁽²⁾、洪徳均田制の實施⁽³⁾、對外的には南方チャンパ、西方ラオス等周邊諸國への遠征等があり、通説の評価そのものに誤りはなからう。なかでも文武の官僚制の整備は他の政策に先んじて行なわれ、彼の成功の重要な鍵となった。但し、この官僚制の整備は聖宗一代で成し得たのではなく、黎朝の成立時から行なわれてきた集權國家完成への諸帝の營みが實を結んだものと言うことができる。本稿は、その官僚制の武班を擔った「清化集團」について、その形成から皇帝直屬の軍事集團になるまでの過程を考察することを目的とするものである。

ところで、黎初の官僚制度を扱った先行研究としては、藤原利一郎氏、J・K・ウィットモア氏、佐世俊久氏等の研究がある。自說展開の前提として、まずこれら諸氏の研究内容を大まかに紹介し、併せて問題點を提起しておきたい。

まず藤原氏は二本の論文⁽⁴⁾で、光順六年（一四六五）頃より始まる聖宗の官制改革の内容と、その實施にあたり、障害となっていた黎朝開國功臣による政權支配について論じられている。

次にウィットモア氏について⁽⁵⁾。本章で述べるが、黎朝の太祖黎利は一四一八年に故郷に近い清化（⁽⁶⁾タインホア省）藍山で、明の支配に對する兵を擧げた。彼に従った諸將（即ちこのうち何らかの功をたて、かつ生き残ったものが諸史料や藤原氏の言う所の開國功臣に當たる）には清化及びその南鄰の乂安（ゲアン・ハティン省）の出身者が多かったことから、氏はこの集團をタインホアグループ（⁽⁷⁾清化集團）と名附けた。そして主として武人的なこの集團が、初期の黎朝の實權を握り、首都ハノイのある紅河デルタ地方出身の文人勢力と政治的に抗争し、最終的に聖宗がこの兩者の融合に成功したという史像を描いた。

最後に佐世氏は、上記二者の論點をふまえて、科學の振興による文人勢力の進出と、中國からの安南國王への冊封による皇帝權の昂揚が、開國功臣を抑え、聖宗期に君主獨裁制が成立したとする。

本稿で述べる「清化集團」に觀點を絞つてみた場合、特にこの概念を案出したウィットモア氏には次のような問題點がある。

まず第一に、開國功臣と清化集團との嚴密な區別がなされていない。よつてそのままこの清化集團という概念を用いることは、デルタ對清化という構圖を描く以上、その有效性を損なう恐れがあるばかりか、危險さを感じられる。

第二に、第一の結果、清化集團の分析はその高位の者の動向に限られ、集團の權力の土臺となつた禁軍その他（第二章第三節で論ずる）の分析が十分行なわれていない。その爲、なぜ聖宗のクーデタが成功したのか、聖宗の文武官僚組織の再編が可能であつたかという疑問に十分答えているとは言えない。

そこで、本稿ではまずウィットモア氏の言う「清化集團」や諸史料にみえる「開國功臣」といった概念の區別をはつきりさせることから論をすすめてゆきたい。

第一章 清化集團の形成

第一節 抗明戰と清化集團

清化地方は紅河デルタ側から見た場合、魅力ある南方海岸平野部への連絡路であるという點、南方チャンパへの攻撃・防禦の據點となる點⁽⁸⁾、ラオスとの國境にあたるチュオンソン（長山）山脈地方產出の珍貴な品々の集積地であるという點、また同地自體がマー河・チュー河という二大河川によるデルタを有しているという點で、非常に重要な地であつた。⁽⁹⁾爲に、黎朝以前の諸王朝は、紅河デルタ地方に都を構えつつも、同地の支配經營に意を注いできた。しかし、古田元夫氏⁽¹⁰⁾がまとめられた様に、紅河デルタ地方とは寧平地方の山地でさえぎられ、西及び西北方面にラオスに連なる山岳地帶を控えた同地は、紅河デルタの政權に對する反亂の據點となり易く、言い換れば容易に別勢力を形成し得たのである。

聖元元年（一四〇〇）三月、陳朝は外戚胡氏によって篡奪される。その胡氏政權も陳朝復興を口實とする明の永樂帝の派遣軍に滅ぼされた。東關城（ハノイ）に交趾布政司を置いてヴェトナムの内地化をすすめる明に對し、各地で反亂が起るが、その中で最大規模をはこつた陳氏の末裔陳簡定・陳季擴の反亂も、紅河デルタ地方に主力をおいた明に對して清化以南の地（海西地方）で勢力をはった。⁽¹¹⁾ 内紛に乗じてこの反亂が明によって撃破された後、黎利が舉兵したのもこの清化の地であつた。

永樂十六年（一四一八）正月、黎利は清化藍山郷で舉兵した。「はじめに」でも觸れたが、黎利の率いた軍事集團を即清化集團と規定するには大きな疑問がある。ウィットモア氏は、黎利集團内の人物で出身地の知れる者のうち、清化以外の者は阮廌、范文巧、劉仁澍、陳杆の四名しか存在していない點を強調している。⁽¹²⁾ しかし、黎利の抗明戰の經過を分析する事により、ある程度は出身地の知れぬ者も、清化出身かそれ以外かの推測はつくものと考えられる。そしてその結果、黎利集團中、清化を出身地とする清化集團と、それ以外の者との區別もつくと思える。

さて、その分析方法であるが、筆者は某人が黎利集團に組みこまれた時期による區分を用いるのが有效であると考える。なぜならば、黎利の抗明戰は、その主たる戰場によって大きく三期に區分することが可能だからである。以下がその區分である。⁽¹³⁾

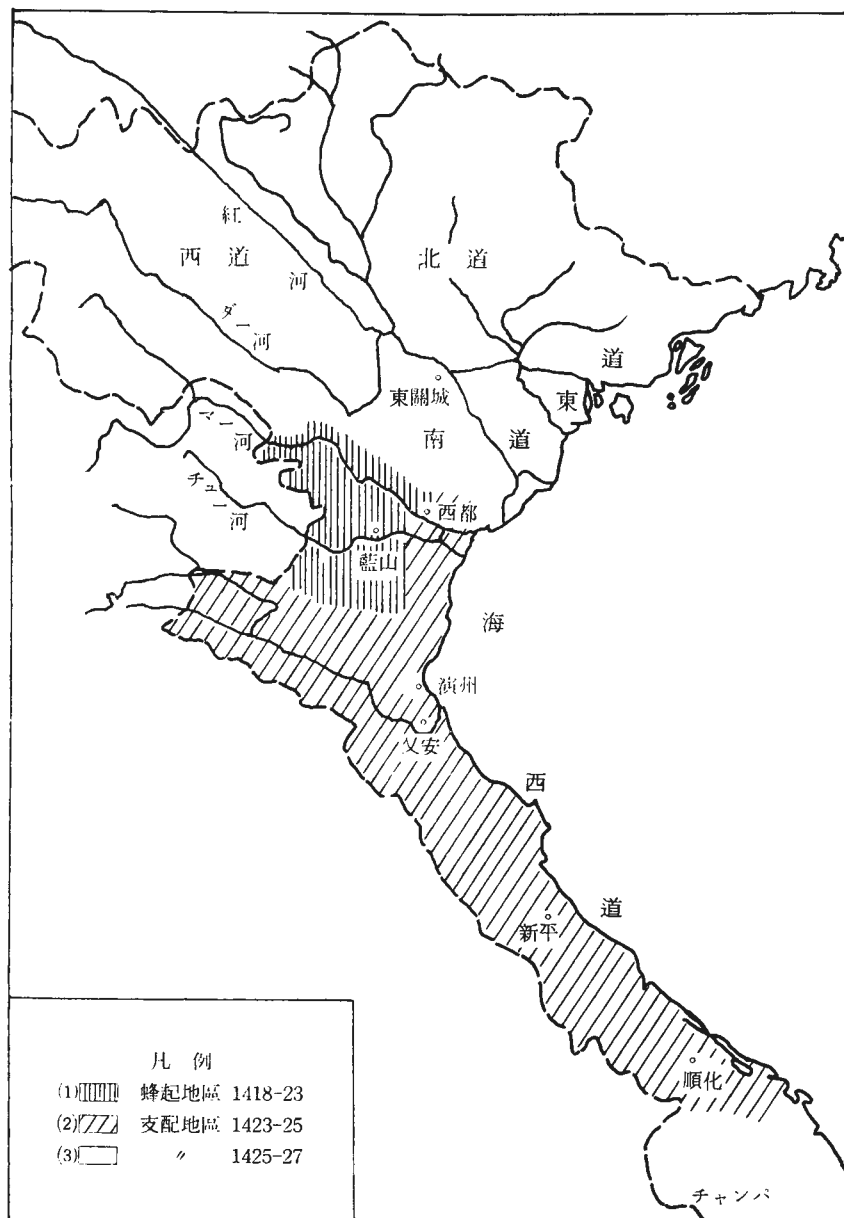
Ⅰ 永樂十六年～同二十一年

Ⅱ 永樂二十二年～宣德元年八月直前

Ⅲ 宣德元年八月～同二年末

Ⅰ この時期は屬明期に各地で起こつた反亂の一つにすぎない。⁽¹⁴⁾ そして、その戰場も清化の西方山岳地帯に限られてお

抗明戦の経緯



Lịch Sử Việt Nam, tập I p. 249 を参照

り、史料の裏付けは乏しいものの、この期の集團構成員は、壓倒的に清化出身者が多かったであろう。また、黎利と最も私的なつながりを持ち得たのも、この期の集團構成員であった。

Ⅱ 永樂二十二年（一四二四）九月に再舉した黎利がこの期に採った策は、まず阮隻の建議に従って南下して父安城を攻略し、次いでそれ以南の地新平（クアンビン省）・順化（トワティエン省）の勢力を編入し、紅河デルタ方面へ北上する、というものであった。この期は、兵力の不足に苦しむ黎利集團が、新平・順化という前述の陳氏末裔（後陳氏という）の残存勢力を編入し、清化以南をほぼ手中にした時期であった。

Ⅲ 宣徳元年（一四二六）八月、父安城包圍中の黎利は軍の一部を割いて北上させ、雲南及び廣西方面からやってくる明の援軍を撃ち、東關城を圍んだ。そしてその直後に黎利自身もその包圍に加わった。デルタの中樞部や海岸地方の勢力が黎利の軍に加わるのがこの時期である。従って、この期に起義に参加した諸將は、デルタ地方を出身地とするものが大半であったろうと想像される。宣徳二年の末、東關城その他に包圍された明軍との間に講和が成立し、明軍は撤退した。黎利が即位するのはその翌年（一四二八）のことである。

以上の三つの時期區分に、諸史料により判明している出身地による區分、即ち⑦清化・父安、④不明、⑤清化・父安以外、を組み合わせると、Ⅰ⑦、Ⅱ⑦、Ⅲ⑦、Ⅰ④、Ⅱ④、Ⅲ④、Ⅰ⑤、Ⅱ⑤、Ⅲ⑤の九つの類型分けができる。

この中で、Ⅰ⑦、Ⅱ⑦、Ⅲ⑦、それにⅠ④を加えたもの、即ち明白に清化出身者と判明した者と、出身地は不明ながら、Ⅰ期に集團に参加した者を清化集團と規定できよう。

第二節 開國功臣と清化集團

順天二年（一四二九）五月に、抗明戦において功をあげた者に對し、爵位が與えられた。『全書』卷十 順天二年五月三

日の條に、

功臣を笱し九十三員を該う……（以下氏名を列舉）

とあるのがそれで、この九十三名（實は九十四名）のことを諸史料は開國功臣と呼んでおり、本稿でもこれに従う。

この中に入った人物は、抗明戦争で功をたて、かつて順天二年五月の時点で生存していた黎利集團の戦功上位者である。まずこれらの人物を前節の分類によって檢證し、清化集團の勢力が如何に強かったかをみてみよう。

。縣上侯三人

1、黎問 ⁽²²⁾
I ⑦ 19

2、黎察

I ⑦ 35

3、黎文巧

III ⑦ 75

。亞上侯一人

4、黎銀
I ⑦ 54

。 (亞上侯) 一人

(5)、黎仁澍
I ⑦ 63

。卿上侯三人

6、黎理
I ⑦ 14

7、黎文靈

I ⑦ 49

8、黎國興

I ⑦ 38

。亭上侯十四人

9、黎隻
I ⑦ 59

10、黎文安

I ⑦ 51

11、黎列

I ⑦ 64

14、黎戰
II ⑦ 73

15、黎魁

I ⑦ 65

16、黎頂

III ⑦ 26

17、黎拙

III ⑦ 79

18、黎磊

I ⑦ 10

19、黎汝覽
I ⑦ 41

20、黎抄

I ⑦ 4

21、黎儉

I ⑦ 28

22、黎栗

III ⑦ 79

13、黎禮⁽²⁵⁾

I ⑦ 62

。縣侯十四人

- 23、黎備 I ⑦ 58 24、黎皮 III ① 25、黎否 III ① 26、黎市 I ① 55 27、黎受 III ① 77
- 28、黎雷 I ① 36 29、黎可 I ⑦ 37 30、黎培 I ⑦ 13 31、黎可郎 I ① 42 32、黎熾 I ⑦ 56
- 33、黎犬 I ⑦ 70 34、黎祕 I ⑦ 47 35、黎國楨 III ① 76 36、黎弼 III ①
- 。亞侯二十六人
- 37、黎爛 I ⑦ 67 38、黎豸 III ①
- 39、62 缺名
- 。關内侯十六人
- 63、黎舌 II ① 74 64、黎璋 III ①
- 65、78 缺名
- 。冠服侯十二人
- 79、黎誼 I ① 21 80、黎遙 III ①
- 81、90 缺名
- 。上智字著服侯四人
- 91、黎克復 I ⑦ 16 92、黎鞋 III ①
- 93、94 缺名

なお、缺名の五十人につき、諸史料により功臣であらうと思われる人物を、以下に列挙する。(27)

- | | | | | | | | | | |
|-------|----------|----|----------|----|----------|-----|----------|-------|----------|
| 黎慎 | (I ⑦ 50) | 黎榴 | (I ⑦ 66) | 黎圖 | (I ⑦ 69) | 黎巴牢 | (I ⑦ 68) | 黎康 | (I ① 1) |
| 黎掄〔論〕 | (I ① 2) | 黎囂 | (I ① 6) | 黎弄 | (I ① 8) | 黎蘭 | (I ① 20) | 黎祐〔祐〕 | (I ① 22) |

朝政權に如何に強く關與したかを見てみたい。

第一節 太祖・太宗期の政權

黎利は順天元年夏四月十五日に即位するが、それに先立ち、陳扞を左相國に、范文巧を樞密大使に任じて政權をかためた。この兩者はともに紅河デルタ出身者であり、同地方の掌握を目的とした措置と考えられる。しかし、陳扞は前朝の陳氏の一族であるという誇りを捨てきれず、不遜な發言が多かった爲、謀叛の疑いをかけられて殺害された。一方、范文巧も、京路での人氣が高すぎたことから誣告をうけ殺された。

その後の政治體制については、藤原氏が聖宗以前の舊支配制度において、開國功臣、特に武臣が軍職についたまま宰相職及び副宰相格の參預朝政・參知政事等の職を獨占した事を示し、これを「開國功臣による武人宰相制度」と名附けた。⁽³¹⁾ 氏の研究に據って、まず太祖期の宰相・副宰相を列舉し、⁽³²⁾ 前章のランキング及び分類記號を附す。

。宰相

范問 順天元年任。

1 ⑦⁽³³⁾
1

黎察

〃

1 ⑦⁽³⁴⁾
2

劉仁澍

〃

1 ⑦⁽³⁵⁾
(5)

黎文安 順天五年任。

1 ⑦⁽³⁶⁾
10

。副宰相

參預朝政

黎銀

順天元年任。

1 ⑦⁽³⁷⁾
4

黎理

〃

1 ⑦⁽³⁸⁾
6

黎文安

〃 同五年までⅠ⑦10

丁列

順天五年任。

Ⅰ⑦11

范盃

〃

(Ⅱ②)

鄭磊

〃

Ⅰ⑦18

阮隻

順天年間任。

Ⅰ⑦9

參知政事

史料に見えず

これによると、順天元年に宰相及び副宰相に任じられたのは六人中五人までが類型Ⅰ⑦に屬する、しかもランキングの最上位クラスに位置する者ばかりである。順天五年に一部増員があるが、この傾向はほとんど變化していない。この點から、藤原氏の論じた「開國功臣による武人宰相制」は、角度を変えてみれば、「清化集團による武人連合支配體制」と言うことができよう。これが太祖期の中央政治體制であった。

太祖は順天六年（一四三三）閏八月に崩じ、わずか十一歳の太宗が即位した。太祖は幼少の太宗の輔政を上記の清化集團に託したが、では太宗期にこの連合支配體制はどうなったか。

實のところ、この連合體制を崩したのは、その構成員の一人である黎察であった。その專權樹立の過程は既に先學によって論じられているが、まず同僚の劉仁澍を謀殺し、自分と不仲の黎理・鄭可を左遷し、黎銀に對しても暗殺者を放ったと言われる。察と共に太宗輔政を遺詔された范問は紹平三年（一四三六）に没した。

これら宰相連合の主要メンバーを除いた後、察は私黨をたてた。その主な人物は、

。黎醞

(Ⅰ④)

。黎囂

(Ⅰ④)

黎蒲

(Ⅰ④)

李牢

(Ⅰ⑦)

鄭磊 I ⑦ 18 黎文靈 I ⑦ 7

黎受 III ⑦ 27 黎領 (II) ①

。黎邦 鄧得

(。は察の親戚)

(34)らであり、清化集團による連合支配體制は一時崩壊しかかったと考えてよからう。

この察黨を一舉に屠ったのが、紹平四年六月から翌月にわたる、太宗による察への「賜死事件」である。『全書』卷十一 同年六月辛未の條によると、太宗は察の油斷に乗じて察黨である殿前都校點黎醢と、右軍同總管黎囂を外に出し、鄭可に禁軍の總指揮權を與えた。そしてそれに察が反對したかどで、言官丁景安らに彈劾させ、翌七月に死を賜った。更に、察にかわって宰相位についた黎銀が、自宅に觀音佛を奉って、太宗妃となった娘日麗が帝の寵愛を得る事を祈願したという密告により、同年十二月に免職の上、やはり死を賜った。(35)佐世氏は、これらの事件について、中國から正式な冊封を受けた事による帝權昂揚の證據である、(36)としているが、果たしてそう理解してよいものであろうか。

再び藤原氏の研究に據って、その後の副宰相格の人物を列舉してみよう。(37)

參預朝政

黎魁 大寶二年(一四四一)任。 I ⑦ 15

參知政事

黎愼 紹平四年(一四三七)六月任。(I) ⑦

杜犬 〃 七月任。 I ⑦ 33

黎受 〃 八月任。 III ① 27

阮熾 〃 八月時點で現職。 I ⑦ 32

鄭可 阮熾に同じ。

I ⑦ 29

黎魁 紹平四年十二月任。太宗二年まで。

I ⑦ 15

これを見れば、藤原氏の論じた如く、黎察・黎銀の死後も功臣による武人支配体制は續いたと言えよう。しかも相變らずその中でも清化集團が大半を占めていることが見てとれよう。⁽³⁸⁾以上の事から、黎察打倒に關しては、それを帝權昂揚の結果によるものと見なすよりも、黎察の獨裁を嫌う帝と、連合支配體制を崩した黎察に對する清化集團の反撃と評價するのが妥當ではなからうか。

第二節 仁宗朝の政權

太宗は大寶三年七月に東巡し、その歸途、八月四日に急死した。そして直ちにその第三子仁宗が擁立された。擁立者の主要メンバーは以下の五人である。⁽³⁹⁾

鄭可 I ⑦ 29

阮熾 I ⑦ 32

黎受 III ④ 27

丁列 I ⑦ 11

范盃 II ④

彼らは太宗朝からの重臣でもあり、當然のことながら政局の主導權を握ることになるわけであるが、太和年間、即ち幼帝仁宗の母阮太后攝政の時期に、この五人に對する攻撃が行なわれ、成功する。まず太和二年（一四四四）に丁列が家族もろとも捕えられ、同六年六月に鄭克復の嘆願により、漸く許された。しかし、その後丁列は仁宗朝では『全書』に一度もその名をあらわさなかった。次に太和三年には、阮熾が占城（チャンパ）攻撃への参加を齎ったという理由で罷職に追

いこまれた。彼も同六年には少保として復歸するが、既に往年の力はなく、宰相グループには入れなかった。更には太和九年（二四五）には私黨を組んだという讒言により、鄭可と鄭克復が殺害され、翌十年四月には息子の黎是の罪に連座して黎受が囚われた。こうして仁宗を擁立した權臣は、全て何らかの形で權力の座を追われてしまったのである。⁽⁴⁰⁾

ウィットモア氏は、阮太后のこのような清化集團彈壓に一定の評価を與えているが、太后のこのような強引な處置を可能にした要因としては、次の二つのことが考えられる。

一つは藤原氏の言う武人宰相の大原則、即ち、大總管等の軍事の要職に就いたまま宰相職を兼務するという原則が崩れ、清化集團の高位の者が純粹に政治家になってしまった事である。先に述べた阮熾が占城遠征を蒞った事などは、その典型的な例といえよう。

いま一つは、上記の結果、特定の者に典兵權が集中してしまった事である。『全書』卷十一 太和七年十一月⁽⁴¹⁾末の條には、

大都督黎犬の男貫之、夜閒衆を聚め、都市に於いて人を毆殺す。事發かれ獄に下す。…（中略）…獄まさに成らんとし、（阮）太后、犬の大臣に居りて禁兵を典どり、帝の倚る所重く、若し之を殺さば恐るらくは犬の心を傷つくるを以って、乃ち法を枉げ、之を赦す。

とあり、黎犬（杜犬）の實力と、それへの仁宗の依存のほどが窺える。この杜犬は太宗時代からの重臣であり、また『黎朝興國功業衍志』⁽⁴²⁾卷一 太和元年正月の條に、

時、母□□縣布衛社杜氏もて宣慈皇太后と爲し、昭華殿に對して群臣に爵品を加封す。國舅杜氏輔政し、帝を抱き扈を輔け朝を視る。政命、杜太^マより出づ。

とあるように、阮太后（杜氏とあるのは明らかに誤まり）と強いつながりを持ち、同時に禁軍の典兵權を握っていたと考えられる。

しかし、阮太后の努力にも拘らず、それによって一氣に清化集團の排除が進んだというわけではなかった。(そもそも杜犬自身も清化集團上位者である)代わりに政權を擔える者、例えば科擧官僚などは別稿で論ずる如く、十分には育成されておらず、結局のところ、太和年間末期から、仁宗の親政期である延寧年間(一四五四〜五九)に權力を握ったのは以下のメンバーであった。

宰相

黎嵩 延寧三年二月現職

陳榴 //

黎醯 三月現職

副宰相

參知政事

李凌

裴擒虎

(1)(1)(1)
(1)(1)(1)

[7](43)

他に『全書』によると、杜犬の子杜祕(一〇七³⁴)、黎受、黎昂らも延寧年間、高位にあったようである。⁽⁴⁴⁾

以上、結論から言うと、基本的には太祖〜仁宗期の武人支配體制は變らず、その中でも清化集團上位の者の力が壓倒的に強かったと言えよう。ただ問題なのは、軍事力を行使する機會の減少から、集團の權力の基礎である軍事力を行使する任から、清化集團上位の者が離れてゆく傾向があった、ということである。

第三節 清化集團下位の動向

次に、本節では清化集團下位の者の動向に眼をむけてみたい。ここで言う下位の者とは、功臣でもランクの低い者、功

臣にランクされなかった者、功臣及び戦死等により功臣になれなかった者の二世・三世や縁者達のことを指す。

黎初の軍事制度については分明せぬ事が多いが、概ね、全國が首都ハノイを除いて東・西・南・北・海西の五道に分かれたれ、それぞれに複数の衛所が置かれた。道には道總管、衛には總管が置かれ、他にも大小さまざまな軍職があった。黎朝では抗明戦等の軍功に報いる爲、これらあまたの軍職に、上記の清化集團構成員を充てた。表2は『全書』にみえる地方軍職に任ぜられた者の一覽である。

これを見て一目でわかる事は、地方においても軍事に關しては清化集團の勢力が強いことである。むろん功により清化集團以外の功臣も一部軍職についているが、ここで問題なのは、政争によって一旦地方に左遷された者を除いては、衛官クラスの人間は中央にはほとんど返り咲いていないという事實である。これは、明との關係が一應安定し、チャンパや北方少数民族との係争地域は別として、軍人の役割が低下したことで大いに關係があると思われる。太和六年に、中央・地方の衛の將校の數を減らした⁽⁴⁶⁾ことも、こうした状況を反映したものであろう。功臣クラスの者といえども、元は中央にいた者以外は、それ以降歴史から姿を消してしまい、中央の政治に影響を及ぼすということはなかったのである。

次に眼を中央に轉じてみよう。中央の軍制も複雑で、史料によって矛盾したり、理解に苦しむ點があるのだが、概ね、御前六軍・鐵突五軍・鐵突十四衛がその主力で、その他に御前部隊・植隊等があった。既述の如く、宰相グループの人間は、これらの總司令官にあたる大總管・大都督・都總管等の職を兼任したのである。殘念ながら、太祖・太宗期、その下位の將校クラスの職にどのような人物が充てられたかは、史料からは斷定できない。しかし、清化集團の上位構成員は、自らの勢力の根幹たる禁軍掌握の爲に、その子弟や縁者を多く登用したことは想像に難くない。⁽⁴⁸⁾事實、時代が下って仁宗期になると、清化集團功臣クラスの二世・三世がその職につけられている例が見られる。禁軍の上から下までを清化集團で占めてしまうのが清化集團の理想であり、またおのが權力の基盤であった。それゆえ、地方軍と違い、禁軍は特にその質の向上が求められていたようである。時代は少し下るが、『全書』卷十一 延寧三年二月四日の條には、

表2 『全書』にみえる地方軍職（太祖～仁宗）

年	月	名	役	職	功臣分類
東道					
紹平 5	6	范 盃	→ 東道行軍總管		(Ⅱ④)
紹平 1	9	阮 宗 徐	安邦路總管	→	
" "	"	黎 遙	安邦路同總管	→	Ⅲ④80
" "	10	黎 壽	→ 安邦鎮衛同總知諸軍事		
" "	"	范 洪 州	→ 安邦鎮衛同知諸軍事		
" 4	6	黎 論	→ 南策上衛同總管		(Ⅰ④)
" "	"	黎 朗	上南策衛總管	→	(Ⅰ④)
" "	"	鄭 可	南策下衛同總管	→	Ⅰ⑦29
" "	"	黎 祐	→ 南策下衛總知		(Ⅰ④)
西道					
紹平 2	11	范 盃	西道司馬	—	(Ⅱ④)
" 4	6	黎 愼	知西道諸衛軍事	→	(Ⅰ⑦)
" "	"	黎 理	→ 參知西道諸衛軍事		Ⅰ⑦6
" "	12	黎 魁	→ 知西道諸衛軍事		Ⅰ⑦15
延寧 3	5	陳 榴	→ 西道都督		(Ⅰ⑦)
紹平 4	7	陳 榴	宣光鎮宣慰大使	→	(Ⅰ⑦)
太和 7	10	黎 蘭	→ 下國威衛少尉		(Ⅰ④)
南道					
紹平 1	8	丁 列	南道司馬	—	Ⅰ⑦11
" 4	6	黎 定	→ 參知南道諸衛軍事		(Ⅰ④)
" "	6	黎 祐	快路總知	→	(Ⅰ④)
" "	"	黎 器	→ 快路總管		(Ⅰ④)
北道					
紹平 1	2	黎 文 安	北道司馬	—	Ⅰ⑦10
" 4	6	黎 愼	→ 參知北道諸衛軍事		(Ⅰ⑦)
" "	"	"	→ 司馬北道諸衛軍事		(Ⅰ⑦)
" "	"	黎 朗	→ 參知北道諸衛軍事		(Ⅰ⑦)
" "	"	黎 銀	北道行軍總管	→	Ⅰ⑦4
" 2	1	黎 冷	北江下衛同總管	—	(Ⅲ④)
" 4	6	黎 理	→ 北江下路同總管		Ⅰ⑦6
" "	"	黎 爛	→ 北江下衛同總管		Ⅰ⑦37
" "	7	阮 隻	北江中路總知	→	Ⅰ⑦9
太和 6	1	阮 宗 磊	→ 中北衛同知		
" 7	7	黎 其	→ 北江衛同知		
" 8	"	黎 楨	→ 中北衛同知		Ⅲ④35

○海西道							
紹平	1	2	杜	犬	→	參知海西道諸衛軍事	I ㊦33
"	4	6	黎	文	→	海西道同都督總管	I ㊦10
"	2	7	黎	雷	→	清化府路都總管	I ㊦28
"	4	6	黎	理		清化路都總管	→ I ㊦6
"	"	"	黎	焜		父安路大總管	→ III ㊦17
"	"	7	陳	榴	→	順化路都總管	(I ㊦)
太和	7	10	黎	蘭	→	新平順化府少尉	(I ㊦)

(註) 各道の上段には道レベルの帶職者、下段にはそれ以下のレベルの者をあげた。

“→役職”は着任, “役職→”は轉任, “→役職→”は在任を示す。

御史中丞范瑜等効奏すらく、黎适、法を奉つること能わずして、今年の會集軍期に於いて、軍人七十人を差して私船を造り、軍錢を損うこと凡そ十八貫。乞うらくは、刑官實に對して按罪し、以って其の餘を懲さんことをと。

とある。黎适は權臣黎受の子であるにも拘らず彈劾されたというのは、前述の杜犬の子貫之の場合と比較した場合、非常に興味深いものがある。

このように、禁軍はなお將校クラスが清化集團構成員によつて占められていたにも拘らず、前述した如く、上位の宰相グループと統屬關係が切れる場合があり、爲に徐々に皇帝の直接指揮下（或いは皇帝と結んだ一部の者の指揮下）に置かれ、軍事官僚化されていったと考えられる。この風潮は、冤罪で死を賜った黎銀の子儒宗が太和五年九月に禁軍の保應軍大隊長に任ぜられるといった皇帝の恩典的な政策⁽⁴⁹⁾によつて、更に進んだものと考えられる。

第三章 清化集團の再編

第一節 黎宜民のクーデタ

延寧六年（一四五九）十月三日夜半、仁宗の庶兄諒山王宜民によるクーデタが成功し、仁宗は同日中に、母后阮氏は翌日に、それぞれ弑殺された。宜民は同七日に帝位に即き、自らが太宗の正統な後繼者であり、仁宗母阮氏が陰謀によつてそれを妨げたのだと宣言した⁽⁵⁰⁾。しかし、このクーデタが單なる帝位繼承に絡む私怨だけによるもの

でない事は、既に先學により指摘されている。

まず藤原氏は、後掲する史料等により、このクレーデータ及び宜民の政治を、後の聖宗の官制改革を先取りするものであったと評價している。⁽⁵¹⁾

次いでウィットモア氏は、宜民の母楊氏が紅河デルタ東縁の海陽の出身者であり、クレーデータに協力した主要人物も同地方出身者であった事から、これを清化集團に對するデルタ勢力側の反撃であるとし、更に科擧官僚も宜民政權を支持したとする。⁽⁵²⁾

更に佐世氏は、兩者の説をまとめ、紅河デルタ出身の母を持つ宜民を科擧出身官僚が支持し、急進的に中央集權化を計ったものであったとしている。⁽⁵³⁾ 即ち、地域的にはデルタ對清化、政治志向の面では宜民を戴く科擧系官僚對功臣という對抗圖が描かれたわけである。

上記説の根據の一つになっているのが次の史料である。

天興二年、春二月、宜民府縣を置くことを議す。

宜民、六部・六科・府縣州官を分設す。

（『全書』卷十二 光順元年の條）

藤原氏はこの期の六部設置が事實であったことを考證された。⁽⁵⁴⁾ しかし、實際に誰がその任についたかがより重要な問題である。つまり、こうした官僚制國家への志向が宜民にあったとしても、その實態がどうであったかまでは氏は論じておられない。

佐世氏は篡奪直後、宜民により歳貢・求封の爲に派遣された遣明使節の中に多數の科擧系官僚が含まれていたことを指摘している。⁽⁵⁵⁾ しかし、これからも宜民政權の中で、科擧官僚がどのような地位を占めていたか不明である。

ではその實態はと言うと、『大越通史』卷三十一 阮熾傳には、

宜民の母、永頼に貫たる^人。清林の人范屯・潘般に倚りて心腹と爲し、要職に居らしめ、三省・察院の大臣と同に政事を議す。權勢烜赫たり。(永頼・青(清)林は海陽地方の地名)

とあり、また『黎朝興國功業衍志』卷一 延寧六年己卯多十月初三日の條には、

太宗長子諒山王宣民、謀りて其の大位を奪わんと欲し、萌心結黨し、南市の肉猪肆屠軍人范屯・潘班と潛かに謀る。

…(中略)…明日、諒山王起兵し、大臣文武の宰相を閹殺す。諒山王自立し、號して天興元年と稱す。朝廷畏懼し、敢て手を効さず、皆法に違ひ忍耐して従う。…(中略)…是時、范屯自ら監東を稱し、潘班自ら掌監西を稱す。…

(中略)…文武各々緘口し、敢えて開言せず。朝政の規模・處事の決斷、皆屯・班より出づ。

とある。この宜民時代に殺されたのは『大越通史』卷三十一 阮熾傳に、

舊臣宰相黎祕・黎醞・黎昂・黎受等、之を誅さんと謀り、皆事泄るるを以て害を被むる。

とある仁宗末期の宰相グループ四人かと思われる。

以上から、宜民の政權の實態は、頂點に自らを置き、その下に清化集團に代わってクーデタの功勞者を重職にすえ、その下に弱體化した清化集團や科擧官僚が置かれる、という様なものであったと考えられる。

乏しい史料に據る限り、確かに宜民は官僚制國家の實現を志向したのである。しかし、その政權の實態は今述べた如くであり、彼の理想は聖宗によって實現されたのであった。

ところで、このクーデタでは、清化集團下位にあたる禁軍將校の動向がはっきりしていないが、佐世氏が述べた如く、宜民の禁軍掌握は、前記のようなクーデタの経緯から、うまく成功しなかった様である。一方、禁軍側も、反宜民の中核たりうる人物をその内に有していなかった。ここに登場したのが(或いはかつぎ出されたのが)清化集團上位の生き残りである阮熾と丁列であった。

第二節 清化集團による逆クーデタ

『全書』卷十二 天興二年（光順元年、一四六〇）六月初六日の條に、

諸々の大臣阮熾・丁列等、義を倡え、屯・般の逆黨を誅し、宜民を降して侯と爲し、嘉王を迎えて帝位に卽かしむ。とあるように、宜民に對する逆クーデタが成功し、嘉王即ち聖宗が擁立された。「はじめに」でも論じたが、この聖宗こそ中央集權的な官僚制國家の完成に成功した皇帝である。

聖宗の一連の諸改革、とりわけ重要な官制改革は光順六・七年（一四六五・六六）頃より本格的に始まるが、ここでの最大の問題となるのは、前記引用文にある如く、逆クーデタを起こした者に「迎えられて卽位した」聖宗が、如何にしてこれら中興の功臣を制して皇帝獨裁へ向けての諸政策を實施に移す事ができたか、という事である。この問題に對する先學の見解は極めて齒切れが悪い。

まずウィットモア氏は専ら聖宗の皇帝としての資質にこれを歸しているが、これでは全く説明になっていない。⁽⁵⁷⁾

次に藤原氏は官制改革の實現理由として、帝の資質、明制に詳しい知識人との接觸、宜民時の下地などを擧げている。しかし武人宰相とのかねあひについては、（武人宰相の反對を押し切つて）敢えて實現に至らしめたのが聖宗の官制改革であるとするが、これも實現理由の説明になっていない。⁽⁵⁸⁾

最後に佐世氏は示唆に富む論述を多く行なっておられ、この期に清化集團を含む開國功臣の數が激減していたことを論じているが、新たに生まれた中興の功臣にまでは言及がない。⁽⁵⁹⁾

この中興の功臣をどう制御していったかが、聖宗の諸政策成功の要因であると筆者は考える。そこで本節ではその要因追求の第一歩として、「阮熾・丁列らを中心とする」逆クーデタを分析してみたい。

さて分析にあたり、「首謀者」とされる阮熾・丁列の兩クーデタ前後に置かれていた立場について考えてみたい。

佐世氏が論じた如く、この時期、清化集團上位者を含む開國功臣の數は政争や賜死、自然死などにより激減していた。當然の事ながら、その中に含まれる清化集團上位者も縮少していたわけであるが、阮熾は既述の如く太和三年に罷職となり、同六年に復歸したが、その位は少保であり、むろん宰相のメンバーからははずされていた。一方の丁列も太和二年に監禁され、同六年に漸く出獄を赦された。『大越通史』卷三十一 丁列傳によると、延寧年間には太保として復職したらしいが、彼も阮熾と同様、宰相クラスの人物ではもはやなかった。宜民のクーデタが成功の後、仁宗朝の宰相グループであつた杜祕・黎受らを中心とする宜民暗殺計畫に参加しなかつた（或いは参加できなかった）のも、そしてそれが幸いして殺戮を免れたのも、いわば權力の無い狀況に置かれていた爲と言えよう。従つてこのように權力を持たぬ二人が逆クーデタを企て、成功した原因を考察する必要がある。そして、二人が共に「中興功臣之第一」と稱された事についても十分疑つてみる必要がある。

前掲『全書』卷十二 天興二年六月初六日の條の續きに、

時、宜民位を篡うこと纔か八月にして、姦回を崇信し舊臣を屠戮し、祖宗の法制、一切紛更し、人怨み天怒る。是に於いて、勳舊の大臣開府儀同三司入内檢校太傅平章軍國重事亞郡侯阮熾・丁列・入内檢校平章軍國重事亞上侯黎陵・司馬參預朝政亭上侯黎念・總知御前後軍亞侯黎仁順・總知御前中軍開内侯黎仁膺・總知御前善棹名軍冠服侯鄭文灝・僉知北道軍民簿籍鄭鐸・殿前司都司揮阮德忠・鐵突左軍大隊長阮煙・入内大行遣黎永長・殿前司指揮黎燕・黎解等相與に議す。…（中略）…朝退き、俱に議事堂崇武門外に坐し、阮熾等義を倡え、逆屯・般を議事堂前に於いて殺首す。因りて諸々の城門を閉じ、各々禁兵を以つてその内難を平らげ、並びに逆黨陳陵等一百餘人を誅す。…（以下略）…と、逆クーデタの狀況がかなり詳細に記されている。

これによると、このクーデタの謀議及び決行には阮熾・丁列・李凌（黎陵）・黎念の他に、禁軍諸隊の將校が加わっていることが知れる。既述の如く、阮熾・丁列は宜民朝にあつてはほとんど無力の狀態であり、當然の事ながら兵權も握つては

いなかった。李陵・黎念に關してもほぼ同様であつたと考えられる。従つて、阮熾らからの働きかけがあつたかどうかは不明であるが、これら禁軍の將校は、上からの命令ではなく、自らの意志によつてクーデタへの参加を選擇したと言えよう。そして逆クーデタの決行の際、阮熾らが宜民黨のトップである范屯・潘般を倒した後、速かに宮中を制壓したのは禁軍であり、彼らを動かしたのはその直接の統率者である各隊の將校達であつた。

逆クーデタの成功後、論功行賞が行なわれ、阮熾・丁列らが功第一とされ、李陵・黎念らがこれに次ぎ、その次に禁軍の諸將校らが賞された。しかし、この論功行賞は果たして妥當なものなのだろうか。確かにこのクーデタの首謀者は阮熾・丁列の二人であつた。しかし、「功第一」には二人が開國の元勳であるという事實も大きく作用していたように思われる。實際に逆クーデタに最も貢獻したのはむしろ各々の禁軍諸隊の將校と、それに率いられた禁軍であつた。そして、聖宗の統治も、阮熾・丁列らと禁軍將校の間には地位的に大きな開きがあり、それでいて上下の命令系統で両者が結ばれていないという實態に沿つて開始されたのである。

第三節 聖宗初期の政策

さて、前節で論じた逆クーデタより、官制改革の始まる光順六年（一四六五）までの時期を聖宗初期とすると、この時期最も問題になつたのは何か。言うまでもなく、中興に功のあつた大臣と禁軍將校の處遇である。

まず聖宗の即位に伴つて阮熾・丁列らが宰相の位に復歸するが、これがなげいと簡単に光順六年に廢止できたのであろうか。先學はこの原因解釋に苦しんでおられるが、この清化集團上位の生き残りによる宰相制は、既述した如く、土臺となるべき禁軍とは切り離されたものであつた。宜民以前のそれとは異なつて、聖宗初期の宰相制は、内容の伴わない名ばかりのものであつた。『全書』卷十二 光順四年十二月の條には、

太傅阮熾等に諭す。宗社の安危、卿數人に在り。卿當に之を深く思ひ、之を熟く計るべし。政事を奏聞すれば、朕力

疾して内決す。卿等外に之を承けよ。

とあり、阮熾等に對し、彼らを尊重しつつも帝自身が政事の決定者であると述べることができるのも、このような宰相制の實態によるものだと考えてよからう。高位を與えられながらも彼らは徐々(60)に政事に對する發言權を奪われ、或いは李凌の如く、逆クーデタの直後、聖宗ではなく恭王をたてようとしたという理由で誅殺されるに至った。それ故、宰相制は官制改革で容易に廢止されてしまったのである。

次に禁軍について。前節で論じた如く、逆クーデタで最も功のあつたのは見方によつては禁軍の將校達であつた。聖宗は宜民とは違つて彼らを掌握することに成功したわけであるが、その成功の要因は何であらうか。

まず擧げられるのは第二章第三節で述べた如く、早くから皇帝による禁軍掌握への營みが續けられていたことである。次にこれも第二章第二節で論じたが、本來宰相が擔うはずの軍事指揮權が失われる傾向にあつたことである。逆クーデタ直後の聖宗にとっては、宰相と禁軍とは必ずしも一體化したものではなく、後者を自らに直結できるチャンスがあつたわけである。

しかしながら、ここにも疑問は残る。それは、禁軍將校が、何故その功をもとに政治權力を握らなかつたのか。それには逆説めくが、何よりも阮熾・丁列の存在が大きい。彼らと將校達の間には地位やキャリアの點であまりにも開きが大きく、名ばかりとは言え、宰相制の存在が、將校達の政事參與をはばんだと考えられる(61)。

しかし、將校達は「實」の方はしっかりと取っている。光順元年十月の論功行賞で、彼らは爵位や世業田等と與えられ、更に、官制改革後の五軍都督府制で、數多くの將校が都督その他にとりたてられているのである(62)。ここに、清化集團は装いを新たにし、純粹の武人たる清化軍團として再編成されることになつたのである。

聖宗初期は表面的には清化集團上位の生き残りによる宰相制が復活し、後の官制改革期までの停滞期と考えられ勝ちである。しかし實際には禁軍の再編、光順四・七年の科擧による文臣の大量登用などといった諸策が着々と進んでおり、む

しろ官制改革へ向けての準備期間と考えた方が相應しいと考える。そして、文・武兩班のうち、武班を擔ったのが清化軍團であった。

おわりに

太祖より營々と續けられてきた清化集團の掌握は、聖宗時に一應完成をみたと言えよう。しかし、聖宗の歿後、ヴェトナムは再び抗爭・内紛の時代を迎える。次帝憲宗（在位一四九七—一五〇四）・肅宗（在位一五〇四）の頃までは比較的安定した政治が行なわれたが、次の威穆帝（在位一五〇四—一五〇九）以降、帝位繼承をめぐる内亂が相繼ぎ、やがて南策地方出身の武人莫登庸により一五二七年黎朝は一時斷絶した。そしてこうした内亂勃發の遠因が、實はこの聖宗初期の清化集團のとり扱いにあると筆者は考える。聖宗以降、武班における清化集團の優位は制度的に認められることになり、それが莫氏反亂の一因になったことは間違いない。そして莫氏を倒して復活した黎朝が頼みとしたのは莫氏打倒に最も貢獻した清化・父安の兵士であり、彼らは再び政治全般にわたって影響力を行使することになるのである。

註

- (1) 例えは *Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam, Lịch Sử Việt Nam, tập I, Hà Nội, 1971, Chương VII* や、片倉機『ベトナムの歴史と東アジア 前近代編』杉山出版社、一九七七、七一—七六頁など。
- (2) 例えはヴェトナムにおいては女性の権限が中國に比べ、強かったことなどが指摘されている。仁井田陞「南方民族法と中國法との交渉—黎朝刑法考—」『補訂中國法制史研究 刑法』東京大學出版會、一九八一、第三部第十二章所收。牧野巽「安南の黎朝刑律にあらわれた家族制度—特にその家産制度について—」『支那家族研究』生活社、一九四四。後に『牧野巽著作集』第二卷、御茶の水書房、一九八〇に再録。山本達郎「安南黎朝の婚姻法」『東方學報 東京』第八冊、一九三八など。
- (3) 聖宗の洪徳均田制に關しては、櫻井由躬雄氏は國有田とし

- ての公田を中央権力が個々の公田耕作農民に均給し、租税を確保するという性格が強かったことを指摘されている。櫻井由男雄「洪徳均田例の分析」『ベトナム村落の形成—村落共有田—コンディエン制の史的展開—』創文社、一九八七。
- (4) 藤原利一郎「黎朝聖宗の官制改革」『黎朝聖宗の官制改革の背景』『東南アジア史の研究』法蔵館、一九八六。
- (5) Whitmore, J. K., *The Development of Le Government in Fifteen Century Viet Nam*, Cornell Univ. Ph. D. Dissertation, 1968.
- (6) 現在のヴェトナムの行政区畫は歴史敘述には不適當なもので、舊フランス植民地期の行政区畫で以下示す。
- (7) 佐世俊久「ヴェトナム黎朝國家の確立過程に關する一考察」『史學研究』一六七號、一九八五。
- (8) 特に十四世紀後半、陳朝の衰えに乗じてチャンパが北進し、同地をめぐって何度か戰鬪のあつたことが諸史料に散見される。
- (9) 桃木氏は、陳朝期、宗室が同地の女性と婚姻を結び、その子孫が代々この地を治め、陳朝支配體制の一環を成していたことを指摘されている。桃木至朗「陳朝期ヴェトナムの政治體制に關する基礎的研究」『東洋史研究』第四一卷第一號、一九八二、一〇一—一〇三頁。
- (10) 古田元夫「ベトナム人の『西方關與』の史的考察」土屋健治・白石隆編『東南アジアの政治と文化』東京大學出版會、一九八四、二一—一六頁。
- (11) 胡朝期、大量の農民が當時ヴェトナムの最南端にあたる化州(トワティエン省)に移され、陳氏の再舉に應じた。
- (12) Whitmore, op. cit., p. 5.
- (13) 黎利の抗明戰に關しては、山本達郎『安南史研究—元明兩朝の安南征略—』山川出版社、一九五〇、六一—一七六二頁、同「明のベトナム支配とその崩壞(一四〇〇—一四二八年)」山本達郎編『ベトナム中國關係史—曲氏の擡頭から清佛戰爭まで—』山川出版社、一九七五、二一五—二五一頁、Phan Huy Lê—Phan Đại Doãn, *Khoi Nghĩa Lam Sơn, In làn thứ ba, Hà Nội, 1977*. によつて。
- 山本氏は黎利の抗明戰を、永樂帝の死去で二分し、前者を黎利の守勢期、後者を攻勢期とされているが、諸將の出身地推定の爲には、宣徳元年八月の紅河デルタへの進出を以つてもう一つ區分する必要がある。
- (14) ヴェトナム側史料は否定しているが、黎利が陳季擴の軍に参加していたことが『安南志原』卷一總要に「黎利、季擴の黨也。」とあることでわかる。更に「明實錄」等によると利が明の官職をうけていることから、季擴の軍にあって相當明を惱ませたことが推定される。清化の一土豪にすぎない黎利のもとに、阮鷹、劉仁澍、裴備、鄭磊など、清化以北の出身者が若干ではあるが加わつたのは、そのような事情によるものであろう。なお、黎朝の開國功臣はすべて國姓である黎姓を賜っているが、本稿では原史料引用等特別の場合を除き、原姓の判明する者は原姓のままに敘述することにする。
- (15) 某人がいつ黎利集團に加わつたかを推定する方法を以下に示す。

(i)この期の重要史料である『藍山實錄』『大越史記全書 本紀』(陳荆和氏の校合本 東洋學文獻センター、一九八五、)を使用。以下『全書』と略記。『大越通史』巻一 などに最も早く某人の名がみえる時點を集團參加時とする。

(ii)別に『大越通史』列傳、『歷朝憲章類誌』(以下『類誌』と略記。)人物志、『大南一統志』(以下『一統志』)人物の條、『欽定越史通鑑綱目』(以下『綱目』)人名註などで獨自の列傳或いはそれに準ずるものがあればそれに従う。

(iii)この作業はあくまで順天二年のランキングに載った人物を類型分けするためのものであり、それ以外の人物、例えばそれ以前に戦死した人物などは特に重要な場合を除き、考慮に入れない。従って以下に續々と記される人物だけが黎利に従った將というわけではない。

以上の原則に従って、一期に集團に参加した者を以下に示す。まず『大越通史』巻一 永樂十六年戊戌正月初二日庚申の條に黎利の起義に従った諸將が列擧されているので以下に示す。

①黎康 ②黎掄 ③黎擥 ④黎抄 ⑤黎禮 ⑥黎磐 ⑦黎汝旄 ⑧黎弄 ⑨黎固 ⑩鄭磊 ⑪鄭悔 ⑫黎免 ⑬黎培 ⑭黎理 ⑮黎車雷 ⑯黎克復 ⑰黎定 ⑱黎朗 ⑲黎問 ⑳黎蘭 ㉑黎誼 ㉒黎祐 ㉓黎度 ㉔黎謙 ㉕黎禎 ㉖黎林 ㉗劉譚 ㉘黎驗 ㉙黎文教 ㉚陳連 ㉛陳稱 ㉜黎景壽 ㉝范龍 ㉞范葵 ㉟黎祭 ㊱張雷 ㊲鄭可 ㊳裴國興 ㊴黎鷲 ㊵黎柳 ㊶黎汝覽 ㊷黎可朗 ㊸武威 ㊹鄭無 ㊺劉忠 ㊻陳笏 ㊼杜祕 ㊽阮膺 ㊾黎文靈 ㊿黎慎 ①黎文安

更に『全書』巻十 同年同月の條によると、③黎石 ④丁蒲 ⑤黎銀 ⑥黎開 ⑦黎熾 ⑧黎踏 『藍山實錄』巻一同年同月の條によると、更に⑨裴備が一期に加わったことが知れる。また『大越通史』巻一 永樂二十年十二月の條に⑩阮隻 ⑪黎領の名がみえる。更に『全書』巻十一 順天元年二月の條によると、龍崖(『綱目』によると起義した藍山にある村名)において功あつた者に對して國姓が與えられているが、その中に⑫黎毓(醴) ⑬黎禮の名がみえている。この⑭と⑮が別人物であることは後述する。

次に獨自の列傳等により、

⑬劉仁樹(『大越通史』巻三十二 同傳)

⑭丁列(『大越通史』巻三十一 同傳)

⑮黎魁(『類誌』巻九 人物誌同傳)

⑯陳榴及びその子⑰陳爛(『一統志』巻七 清化省ト人物の條)

⑱李巴平(『大越通史』巻三十一 黎黎傳によれば、彼はこの時期戦いに参加し戦死した李家の父である)

⑲黎圖(『綱目』巻十三 平定王二年(一一四九)五月の條及び註)

⑳杜大(ファン・ダイゾフン氏の家譜をもとにした研究によると、杜大は一名杜大で、黎利の元家奴であり杜祕の父であつた。Phan Dai Doan, "Lê Lợi và tập hợp lực lượng, chuyên biên quyết định thắng lợi trong phong trào giải phóng dân tộc đầu thế kỷ XV," *Nghiên Cứu Lịch Sử*. (以下 *NCLS*) 219, 1984, pp.34-41)

以上のうち、清化出身者は次の通りである。

- ④黎抄(『一統志』卷十七 清化省_下 人物の條に黎壽域の名がある。『全書』卷十一 太和六年二月の條によると抄はその父である。)

⑤黎禮(『大越通史』卷三十五 同傳)

⑭黎理(『大越通史』卷三十三 同傳)

⑮鄭克復(『一統志』卷十七 清化省_下 人物の條)

⑲范問(『大越通史』卷三十三 同傳)

⑳黎林(『大越通史』卷三十一 黎來傳附黎林傳)

㉓黎察(『大越通史』卷三十一 同傳)

㉔鄭可(『大越通史』卷三十一 同傳)

④①阮汝覽(『一統志』卷十七 清化省_下 人物の條)

④⑦杜祕・④⑧杜大(Phan Dại Dỗn, op. cit., p. 36.)

④⑨黎文靈(『類誌』卷九 人物誌同傳)

⑤①黎慎(『大越通史』卷三十三 同傳)

⑤②黎文安(『大越通史』卷三十三 同傳)

⑤③黎石(『大越通史』卷三十一 同傳)

⑤④黎銀(『大越通史』卷三十二 同傳)

⑤⑤阮隻(『一統志』卷十七 清化省_下 人物の條)

⑤⑥丁列(『大越通史』卷三十一 同傳)

⑤⑦黎魁(『類誌』卷九 人物誌同傳)

⑤⑧陳榴(『一統志』卷十七 清化省_下 人物の條)

⑤⑨陳爛(『一統志』卷十七 清化省_下 人物の條)

⑤⑩李巴牢(『大越通史』卷三十一 黎家傳)

次に父安(ゲアン、ハティン省)の出身者は次の通りであ

る。

⑤⑪阮熾(『大越通史』卷三十一 同傳)

⑤⑫鄭圖(『綱目』卷十三 平定王二年五月の條註)

父安は清化の南鄰りであり、特に陳季擴の擧兵時、清化勢力と行動を共にした事から清化に準ずるものとして扱う。

次に他の出身地のわかる者は以下の通りである。

⑤⑬鄭磊(『大越通史』卷三十三 同傳によると嘉遠山藥社巨

賴林(ニンビン省)の人)

⑤⑭阮薦(『類誌』卷七 人物誌同傳によると上福榮溪(ハノイ省)の人)

⑤⑮裴備(『綱目』卷十三 平定王九年八月の條註によると、

天本(ナムティン省)の人)

⑤⑯劉仁澍(『大越通史』卷三十二 同傳によると大慈縣安順上社(タイグエン省)の人)

(16) 永樂二十二年(一四三三)に、一旦明に屈伏し、藍山に戻った黎利は、翌年七月、永樂帝が崩じたのを機會とし、九月再舉した。

(17) 『一統志』卷十七 清化省_下 人物の條の黎隻の註に、

東山縣の人。本姓阮。：(中略)：陳末、明人政苛にして民之に苦しむ。隻、州里を結集し、義を唱え黃峽山洞に築壘し、焉に居る。：(中略)：兵千餘有り、號令、東山・豊貢・玉山數縣に行なわる。：(中略)：黎太祖藍山に起兵し、人をして之を招き、問うるに兵事を以てす。隻請うるに、先ず父安に入りて琴彭の砦に據り、撫順攻逆し、然る後、徐に東都に出づれば則ち大事成る可しと。太祖

之を然りとし、進んで又安城を取る。…(以下略)とある。

山本氏の研究では、阮隻については觸れられていないが、ヴェトナム人史家はこの阮隻を高く評價している。Pham Văn Kinh, "Cuộc khởi Nghĩa của Nguyễn Chích," *NCLS* 155, 1974, pp. 68—78, Phan Huy Lê—Phan Đại Doãn, *op. cit.*, pp. 103—111.

(18) この戦略に最も功のあったのが陳氏の末裔陳捍〔扞〕で、彼は反胡氏・反清化色の強い新平・順化の勢力と黎利集團を結びつける役としては最適任者であった。

(19) このⅡ期に集團に加わった者を列擧する。

⑦陳(元)捍(註(18)の作戦時に名が初出)

⑦范益(『全書』卷十 永樂二十二年十二月の條に初出)

⑦張戰(同右)

⑦黎舌(『全書』卷十 永樂二十三年四月の條に初出)

これらのうち出身地がわかるのは、⑦が『大越通史』卷三十一 同傳によると立石(ソントイ省)で、③が清化(Phan Đại Doãn, *op. cit.*, p. 36)である。

(20) Ⅲ期に集團に参加した者を示す。

⑦范文巧(『全書』卷十 宣德元年八月の條)

⑦黎國楨(『全書』卷十 同年十一月の條)

⑦黎受(『全書』卷十 同年十二月の條)

⑦黎冷(同右)

⑦何栗(『大越通史』卷一 宣德二年二月の條)

これらのうち⑦だけが、『大越通史』卷三十二 同傳によ

ると、京路(ハノイ)出身であることがわかる。

(21) このランクで問題になるのは、⑥劉仁澍・⑦阮鷹・⑧陳捍の名が無いことである。ウィットモア氏は、劉仁澍はリスト漏れ(註(22)参照)、陳捍は『大越通史』の列傳からその原因を知ることは不可、阮鷹は『大越通史』に列傳そのものが無いとしている。Whimmore, *op. cit.*, p. 25, n. 124 劉仁澍に關しては氏に同意するが、陳捍は本文にもあるように順天

二年五月以前に殺されており、リストに載らないのは當然である。又、阮鷹に關しては、本文で論じたように、このリストの作製者が彼であったからだと考える他は無いと考える。

(22) この1—94はひろく原史料に附されていないが、單に便宜的なものでないことは『大越通史』卷三十二 黎仁澍傳に、

(順天)二年五月、上、功功臣に^レ笱し、^レ亞上侯に封ぜられ、名は第五に在り。

とあることから知れよう。則ち、例えば同じ亭上侯でも先に名の出ている方がランクは高いわけである。

(23) この○圍みの數字は、註(15)(19)(20)のそれに對應する。

(24) 註(22)参照。

(25) 佐世氏はこの⑥の黎禮を⑤の黎禮と混同しておられる(佐世前掲論文頁三十一・註三十二・論文末の附表一)。⑤は⑥の丁列の兄で、黎利の甥にあたる人物で、宣德二年三月八日、明に捕われて殺された。⑥は太和六年(一四四八)まで生きた人物で、全くの別人である。

(26) 註(15)(19)(20)に全く出てこない人物は、宣德元年十一月に黎利がハノイを圍んだ後、なおデルタ地方各地で戰鬪が一

年以上續いた事を考慮し、Ⅲ④と判断した。

(27) その根據は、

(i) 順天二年五月を境としてその後兩方にその名が史料にあらわれ、かつ黎姓の者

(ii) 列傳等があつて、「國姓を賜った」等の記載のある者である。

(28) 陳荆和氏によると、醴と醴とは字音・字義とも似ており、同一人物とのことである。校合本『全書』卷十一 紹平元年

二月の條に附した按文参照。

(29) 清化集團の量的優位はこれからも察することができが、ウィットモア氏のようにⅢ④の存在を全く認識しないのには同意しかねる。(Whimore, *op. cit.*, pp. 5—6)

(30) 桃木前掲論文、一〇九—一一〇頁。

(31) 黎初では左右相國・檢校平章軍國重事・特進開府儀同三司などが宰相職に當り、宰相職や副宰相職に就く者は、それぞれの本官にこれらが加授されるのが例であつた。藤原「黎朝聖宗の官制改革の背景」四九一—四九三頁。

(32) 藤原前掲論文、四九二—四九三頁。

(33) 以下、功臣の類型及びランキングをこのように示す。

(34) 藤原前掲論文、四九五—四九七頁を参照。『全書』『大越通史』卷三十二 黎察傳等により、彼によって出世し、又彼の失脚によつて左遷等の罰を受けた者を指す。ただし、黎文靈は察の賜死に「直諫して阿らず」(『類誌』卷七 人物誌同傳)、強硬に反對した爲に降格處分を受けただけであり、純粹の察黨とはいえない。

(35) 『大越通史』卷三十二 黎銀傳による。

(36) 佐世前掲論文、二九—三〇頁。

(37) 藤原前掲論文、註六。ただし氏は黎大と杜大を別人にしてゐる。

(38) 黎銀の賜死に關しては不可解な點が多い爲、論評を避けた。

(39) 他に宰相として黎愼(『大越通史』卷三十三 同傳)、參預朝政として鄭克復(『全書』卷十一 太和三年六月の條)などの人物が存在した。

(40) 范盃については、『全書』卷十一 太和七年二月の條に、前總管黎盃に錢二十貫を賜う。盃、開國の勳舊にして、久しく風疾を痼するを以つて閑居すること十七年。是に至りて疾少しく痊え入調す。故に特に之を賜う。

とあり、早くから第一線を退いていた事が知れる。

(41) 『全書』の記事は繫月のはっきりしない場合が多い。従つて例えば四月の條と九月の條の間にある記事は「四月—九月の條」と引用部分を示す事とする。なお末とあるのは年末のことである。

(42) この書は東洋文庫藏A—N637の番號をもつマイクロフィルムであるが、残念なことに本書に關しては、Gaspardone, E., "Bibliographie Annamite," *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 34, 1934 にも何の言及もなく、史料價値も劣ると考えられる。しかし、『全書』『大越通史』とは別系統の原史料に據ると思われる記載を多く含んでいる。また『全書』卷十一 延寧六年十月三日の條に引く

『光順中興記』は、宜民のクーデタ成功の原因が阮太后と杜犬の二人にあるとし、「太后阮氏、牝鶏にして晨を司り、都督黎犬、狡兎にして命を執る。」と痛罵している。

(43) 抗明戦で戦死した李篆（清化出身）の子。

(44) 『全書』巻十二 光順元年（一四六〇）十月十一日～二十七日の條による。

(45) 『類誌』巻三十九 兵制誌設置之類等による。

(46) 同年四月に諸衛軍・御前各軍・鐵突五軍の將校が全て毎軍二員に減らされた。

(47) 『類誌』巻三十九 兵制誌設置之類による。

(48) 鄭可（一〇七二）の子鄭造、黎銀（一〇七四）の子黎儒宗（本文に後述）、黎蘭^④の子黎仁立らが仁宗の太和年間、禁軍の將校として名がみえる。

(49) 更に時代は下るが、鄭可の子孫が聖宗朝で軍人として重用されている。

(50) 宜民は太宗の長子で、大寶元年正月二十一日に皇太子となつた。しかし、生母楊氏が驕慢になったということで罰せられ、翌年十一月十六日、阮氏の生んだ邦基（仁宗）が皇太子となり、宜民は諒山王に降格された。ウィットモア氏は、黎朝の諸帝（六代憲宗まで）が宜民を除きすべて清化出身の母を持つことに注目し、これを清化集團によるデルタ勢力への攻撃の一例とした。Whitmore *op. cit.*, p. 33, n. 161, n. 162

(51) 藤原「黎朝聖宗の官制改革」、四七一～四七四頁。

(52) Whitmore, *op. cit.*, pp. 77-86.

(53) 佐世前掲論文、三六一～三八頁。

(54) 宜民以前には存在が確認できなかった兵部・刑部の尚書に敕諭した記事が『全書』巻十二 光順四年（一四六三）十二月の條に見える。

(55) 佐世前掲論文、三六一～三七頁。

(56) 黎朝史で「中興」と言えば普通は一五二七年に黎朝を断絶させた莫氏を追い拂い、黎朝が再興した時を指すが、史料も『光順中興記』（散佚）等があり、この逆クーデタも中興と呼ばれていた事が知れる。本稿で言う中興は後者を指す。

(57) Whitmore, *op. cit.*, pp. 98-150.

(58) 藤原「黎朝聖宗の官制改革の背景」、五〇一～五〇六頁。

(59) 佐世前掲論文、三八一～三九頁。

(60) 兵權を奪われながらも、中興の功臣達は莫大な世業田等を与えられた。阮熾に至っては、六鎮・十九府二十五縣九十三社に分散し五二三マウ（一マウは約三六〇〇平方メートル）を与えられた。Phan Huy Lê, "Chê độ ban cấp ruộng đất thời Lê sơ và tính chất sở hữu của loại ruộng đất thế nghiệp," *NCLS* 199, 1981, pp. 15-19.

(61) 例外として、禁軍將校クラスからは、鄭文瀾が光順二年に參預朝政に任じられている。

(62) この代表的な例が阮德忠で、更に彼の娘（次帝憲宗母）が聖宗と婚姻を結んだ。阮熾には八人の娘がいたが、一人として入侍した事實はな。

(63) 中軍都督府は、京師・清化・乂安より兵を集めた。Whitmore, *op. cit.*, pp. 182-185.

this issue: 1) With what procedures were documents concerning police activities handled? and 2) How were police duties apportioned between the local yamen and the Green Standard forces? The results indicate that, with regard to question 1), the documents concerning police activities were handled by the same people and with the same procedures as other administrative documents. With regard to question 2), it was the practice of the time to send out yamen to handle non-violent incidents and to send out Green Standard troops to handle violent incidents. But it was only with the advent of the Queue Cutting Case that this procedure was put into law.

These results confirm the above mentioned thesis for the Qing case. At the same time, the research indicated the special characteristics of the Qing dynasty. Namely, the Qing state generated a huge number of administrative documents, and since police documents were not treated separately, there were apt to be delays in responding to law enforcement problems.

CONCERNING THE THANH HÓA GROUP IN THE EARLY YEARS OF THE LÊ DYNASTY IN VIETNAM

YAO Takao

It is generally recognized that in Vietnam, the reign of the fifth emperor of the Lê 黎 Dynasty, Lê Thánh Tông 黎聖宗 (r. 1460–97) achieved a golden age. The greatest achievement at this time was the consolidation of the civil and military bureaucratic system. The purpose of this paper is to clarify this process of control over military officers.

In 1427, Lê Lợi 黎利 caused the abdication of Ming's troop and in the next year took the throne himself, but political power was in the hands of the generals who helped him with this deed. The posts of prime ministerial rank were dominated by men of the same area as Lê Lợi, that is Thanh Hóa 清化, and they made up the so-called "Thanh Hóa

Group.”

This system basically continued for the early period of Thánh Tôn's reign. However, later, this formula of having a prime minister who was also serving in the military collapsed, and at the same time, by the efforts of the emperors of the Lê Dynasty, a control over lower commissioned officers of the palace guard was promoted. From the time of the coup d'état of Lê Nghi Dân 黎宜民, the high ranking Thanh Hóa Group almost completely ceased to exist. Then, Thánh Tôn, who became emperor in a counter coup d'état, took advantage of this situation, and succeeded in taking complete control of the palace guards. Thus the prime minister system came to exist in name only. At this point, the Thanh Hóa Group was effectively reorganized into the Thanh Hóa “Military Group.”